永遠の別れ

私たちはさまざまな別れを経験している。何でもない別れと思っていたものが、そのまま永遠の別れとなってしまった場合もある。「別れ」のその別れ方を思い浮かべると、別れはやはり悲しいものである。

日中戦争が始まったのは昭和十二年七月・遠い日、拒むことのできない赤紙一枚で、愛する家族と別れた光景をじっと見てきた人々も今は少なくなってきた。

過ぎし歳月の中、父母はあの世へ旅立ち、とても生きては帰れないとあきらめていた私は生きている。

羽田から福岡へ向かう飛行機の中で隣の席の中年の男性がすこし疲れたような口調で、次のような話しをした。

「私は今日、泉岳寺に行って来たのですが、やり切れない気持になり、堪え難い寂しさを感じました。一人の老人の首と引き換えに、浪士全員の切腹、見方によっては斬首ですよね。親、妻子、兄弟、姉妹、恋人、友人らは死に赴く彼等をどのような思いで送ったのでしょう。

どんな理由があってのことか、わからないがあの粗末で、小さな墓はなんですか。あれでは浪士全員が

哀れですよ。
せめて、せめて死後ぐらいは大切に扱ってやらないと……」
そう言って、うっすらと涙を浮かべた。

泉岳寺・曹洞宗
東京都港区にある。万松山と号し、一六二一年(慶長一七年)徳川家康が宗関和尚に命じて外桜田に創建させたのを、寛永一六年現在地に移転したといわれている。
播州(兵庫)赤穂城主浅野家の菩提寺で、浅野長矩夫妻・赤穂四十七士・天野屋利兵衛・村上喜剣らの墓がある。
元禄十四年三月十四日、殿中「松の廊下」で後の「忠臣蔵」へと発展する刃傷事件は起こった。
巳の上刻(午前十時)から六つ刻(午後六時)過ぎにかけて、刃傷……田村邸お預け……評定……切腹……と、その日のうちに矢継ぎ早に執り行われた。
「切腹」……殿中での刃傷とあれば已むを得ぬ裁きとはいえ、問題なのは、浅野内匠頭がいかに青年の激情家にあったにしろ、多くの家臣、家族を抱える大名であったのだから、今少し慎重な調査をすべきではなかったろうか。喧嘩両成敗の原則を踏みにじった、公平を欠く短絡的な裁きが、浪士たちの仇討ちへと発展したのである。

昨年、一昨年と私の話し相手が相次いであの世へ旅立って逝った。鋭い悲しみが私の胸を突き刺した。故郷福島の海や山、出身高校のある平戸のことなどを語る時には静かな熱を帯び、詩情が漂ったものである。

彼がわが家にやって来る時には、私は必ず京都の酒を用意した。私が大きな手術を受けた時、遠方からやって来た彼の顔色は青かった。今生の別れになるのではという不安からか落ち着きがなかった。二人でよく映画を見たものである。

米国西部のワイオミング州、ロッキー山脈のふもとに広がるグランドティトン国立公園・その一角に、開拓時代の丸太小屋が荒れ果てたまま、ポツンと今でも取り残されている。

映画「シェーン」のファンが大勢やって来ては、シャッターを切っている。

映画が公開されたのは１９５３年(昭和二十八年)。

冒頭と最後のシーンが私の胸を強く打った。

一度は捨てた銃を手に、シェーンは闘いの場に出向く。

「銃は捨てたんでしょう」

とマリアンが言った。

「気が変わった。あんたや家族を守るために」

そう言って、手を握った。最初で最後の触れあいだった。

銃撃戦の後、静かに去って行く男の後ろ姿。この別れ方が世界中にファンを広げた。私はこの映画の中

の背景にそびえるロッキーの山並がたまらなく好きになり、彼と一緒に写真を撮りに行こうと話し合った。それもはかない夢となった。

体調が悪く彼の墓参りに行けないのが残念でならない。

父が亡くなったのは昭和二十二年一月六日、こんこんと眠り続ける父だった。医師の指示だったと思うが足許に湯タンポを入れたのはいいが、足が低温火傷をおこしていた。私は、

「ご免なさい、ご免なさい」

と小声でつぶやき足をさすりながら泣いた。

人生最後の場でこのような不始末をした自分が悲しかった。悔の残る悲しい父との別れであった。

いま私の手許に古い懐中時計がある。父が何十年も愛用したものである。父は考えをまとめる時、必ず時計を取り出し見るくせがあった。

終戦後の食糧難時代、買い出しは殆ど母がやっていた。その日は、珍しく父が私を連れて、島外の農家を廻ったが母のようにはいかなかった。父はあきらめたのか時計を取り出しじっと見つめ立ち去りかけた時、倉庫の方から来た老人が、

「お金はいらん、これを持っていかんですか」

そう言って米袋を板の間にドサッと置いた。父は驚いた様子だったが、時計を取り出し老人の前にそっと差し出した。

老人はあわてて

「そがんことせんでよかとですよ。私は病気でそう長生きでけんとです。生きとるうちにちょっとだけ人助けをしたかとです。遠慮せんで持って行かんですか」
そう言って時計を押し返した。父の眼はうるんでいた。
二人で分けて背中に負い、わが家へ向かったが足は疲れ、米は重かった。だが気分は軽かった。わが家へ着くと母は驚き声も出なかった。
戦友会のメンバーも殆どがこの世を去り、わずか残っている者も老いて集まることができなくなった。
最後の戦友会の時、一人がこんな話をした。
若くして戦死した者は可哀想だというが、それより輸送船に乗り、祖国日本に最後の別れを告げた後、敵と一戦も交えることなくバシー海峡の藻屑と消えた者の無念さは、計りしれないものがあるのではないかと言った。
旨い鉄砲漬や絶品の菓子を定期的に届けてくれた彼がいなくなり、寂しくなった。
私のよき遊び相手だった平戸の友人は、尺八を演奏しながら大勢の人の前でコトリと逝った。多くの逸話を残してさっさと去って行った。
「おーい、生きとるやー」
とよく電話をした彼も、さすがにあの世からはかけてこない。
私も、さして遠くない時に死ぬことは確実である。しかし、兄は九十五歳、姉は九十二歳になっても元気である。順序があるので私は簡単にあの世に行けないでいるが、さてどうなることやら。